

# ロツポンギのゆでガエル

祖峰<sup>そほう</sup> 傾<sup>けい</sup>（木崎俊造） 陸自76

『修親』は、陸上自衛隊幹部自衛官向けの機関誌で、毎月刊行されているものである。その巻頭言は、陸自のトップである陸上幕僚長が自分の考えを表明する場の一つにもなっていた。機関誌の全記事は読まないが、陸幕長による八百字ほどの文章は、その考え方や内面を知ることができるということで、ほとんどの陸自幹部自衛官は熟読する。そんなこともあって、陸幕長は毎月一度のこの文章に頭を悩ますと聞いたことがある。

平成の初めのころの話である。

次回の巻頭言を考えていた陸幕長は、防衛課長に対し、「これから取り組む陸自の体制改革についてのネタはないか」と、御下問した。陸自の組織や業務の改革が来年度から本格化するという時だった。その改革を先頭に立って推進する部署が、陸上幕僚監部防衛部であり、その下の防衛課であった。最も先端は、防衛課の班の一つである防衛班であった。

防衛課長は、もちろん自分も考えるが、部下の防衛班長の私にもネタ探しを求めてきた。私は、これからの陸自の改革を陸自全幹部に知ってもらういいチャンスだと考え、その提案を重く受け止めた。

私の作成した文章は、陸上自衛隊の体制改革の意義から始まり、その狙いと組織の改編についての概要を説明し、OBを含め現役隊員の理解と協力を求めるというものだった。真面目で硬い文章だ。それはよくよく分かっていたが、陸上幕僚長の名をもつて示す文章の一部になるかもしれないと思うと、少しばかり気合が入った。

防衛課長が作成した文章は、私のものとは全く違っていた。

「ゆでガエルという話。冷たい水にカエルを入れ、ゆっくりと水温を上げていく。カエルはその変化に気がつかず、いつの間にかゆで上がってしまったて死んでしまう」という寓話を引用している。

続いて、陸上自衛隊の体制改革の意義と内容をさらりと述べ、最後に、

「陸自全幹部が世の中の動きをしつかり捉え、決して、ゆでガエルにならないよう心をついて改革を推進していこう」という趣旨で締めくくられていた。八百字

の原稿として完璧なものだった。

（参りました）

私は正直そう思った。私の原稿は、真面目で硬くて余裕がない。課長のものは、改革の推進に対する心構えを焦点に、平易でユーモアがあり、ベテランから若手にいたる全幹部の興味を引き付ける文章だった。

それでも課長は私に気を遣ったのだろう、「ゆでガエル原稿」と私の「硬い原稿」の二つを陸幕長に提示した。万に一つも私の原稿が採用されるわけがないのに……

陸幕長は、ザックバラんな方で、分刻みのスケジュールの中に僅かな時間があると、部長や課長室に顔を出し雑談をする。その雑談の中に物事の本質が含まれていたりする。時には班長以下の執務室まで顔を出し、ユーモアたっぷりの話をする。強面で、もの言いがストレートだから若手の幕僚には緊張が走るが、内実は穏やかで優しい方である。懐に飛び込むと、実に清々しい気持ちになる。

課長室に呼ばれた。呼びにきた庶務係が、「課長室に陸幕長が来られています。班長に来てほしいということですよ」と言ってきた。私は、メモ用紙とボールペンを持って課長室

へ向かった。

「おおく班長、まあ座りなさい」  
陸幕長が笑顔でソファを指す。課長も穏やかな表情である。

「巻頭言のネタありがとう。陸自改革の取り組みについてよく書かれている。それにしても班長はまじめだなあ。文章が少し硬いな……」

それについては課長の「ゆでガエル原稿」を読んだ時に百パーセント納得していた。

「今回は課長の文を使うわ」と陸幕長。私は「分かりました」と大きくうなず頷いた。

江藤課長は私の四つ先輩である。若い時分から米国留学などを経験し、将来の陸自を担う人材と称されていた。防衛課長に着任する前は、岡山県の日本原駐屯地にて野戦特科連隊長として勤務していた。

私の六本木勤務は、通算7年に及んでいる。少々慣れ過ぎの感が出てきているのかもしれない。課長と私は、わずか4年の差ではあるが、これからの私に4年が加算されたとしても、課長の域には到底及ばないだろうと思った。

私自身、「ゆでガエル」の戒めを肝に銘じたのだった。